国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

春色梅児誉美　巻の六

江戸　狂訓亭主人作

第十一齣

鳥一羽漂て出るゝ朝接露軒〻山茶の客をまゝり
て朝まゞ元霧屋ゞ家ゝ小みすゝひ〻表二階の逗酒とり
ちゝしる皿小鉢下へ持ゆくその跡ゝ小の婦多川の米
八ゞ知ゝ小ゝ恋衣恩ゝ小ゝ若せるにあらねぞ胸よりな
ゝく此糸ゞ一モン工米八さん初つてのゝ通り私ゞ自まんで

愚賢やいさこの願がけをきやうこの禁物とかの誓
ておりイしくづあれまりどやありイまめくうそりやア成
わど最さえい男仏のいくづふなもろ言もあくらうが
強ぶうのふまけよろ私が参えふ達引でこまでふ
ちと信切と勤いふまぎふありイしてあんまりどやみ
せんう一おいくえエそりやモウなと恨とおつまりま
てもゆーもこれとへぞれます甘え今さく私ぐぞのやうに
やてもえ拝へと言訳らいとやーいでもありませう

けまでさくそりとこ訳どやありませレョこのナサそりや
モウ初めろして表れた良を噛まる今ごで世話をして
上エーくのが私のあやまりでざまたくそんも言ふまの
まーてへ城ふ私が済ません実よ多藤さえのお供と
て爰まで参つく最さえおいくえの所へお出ざとへ言
ぞとこまとこでありますくう門所へ遠言ふ私が身
おいくえエい下へ形で言伝まて堀の舟宿で延津賀
さえよ爰まーて濱の病へ涙て今朝最さえのお迎へ

ごてうおいとんゆもお見よかからうとやつてきて喜と
ら義さえいめのべ余所へお出で今モ帰りておきやひご
といたまて私もどクラーてぞうせうとやつてあります
きえでどざいますのをこの「そりゃ茶屋元と申したこと
目もきゝ伝とでも言ふ迄トまたこの「その恨み中くふ
ありとハ思ひませんけれとこと私ガ身の心中さて
どのせうごとやしめす始めい実ゝ義さえのお影で身体
ふ他所行も遠言の安いと丹さえと連へおいとん特人

さえのいとふいとまたは信切その姉さふ引てアノ
住ようと義さえガ如ふことを拵とあうふ月ゝの存義
を茶や舟宿宅へかゝるまどお客へ義さえをおゝふ方
ごゝ茶屋と思ふの二道を情で塞ぐ恋の責動きの
きまぬさ一向ひも諸の出合をいつくと引ふも義さえ
へハ吾まゝらしく思ひまてもおいとんへの義さえ泣つ
ハ親つ言ねけまびまこと舟宿の亭こさえや損れの茶屋
元人傳ふまをかハ品をこふぶゝまはぎりて抜とこて

はでハ[illegible]るさるめ[illegible]とゝの翌日翌夜勿体ないわど
信切よいそれて着てもッイちゃ[illegible]ハと疑ゝの出来る沢
でハるゝいつも私が突ゆゝと乳母の茶ゝんざま
色気も恋もさあたてるあて寝のようじで二度三度
ゆゝといべ[illegible]ゝ長ゝと部やゝまで[illegible]の土産物
自ト人出居ゝの私ゞ抱への子供のまゝもあつけば
あくすると已ぶが増長すると蔭言ハいわる胸の
ゝゝさも初でいべ丹さんの貪苦をみゝぐおいゝんの

情と他でゆゝとまいぞうぞすゝぐおいゝん（息ゞ）の
出来るあうと偷伽山への月参り妙見さま（千扁）の
おゞいゝいゝその日で浮と親子の殺唄を導くも
おいゝん挙さんのおゝいゝハ日ホ或ゞびいるゝす
ハありませんョどゞで今までのあうふ記ハふして
おゝんなさいョト（ゝんゞゝんゞゝんゞゝんゞゝんゞゝ）（ゝすゝゝゝ

あくびをしてゐるが養さんの癖ぢゃ
誘ふのが在のない人ぢゃすぐ風と
と其処へ一図ふるえるふあるのが養さんの特ち丈
でおいとゝ私もアト言て跡といちぢやそふに此
おいゝん發明ぢゃ養さんの世話ゆいまでいまぢ拙
言のまぐとハせざるめろ　モシエトおいらの事ぢゃそふ
ざまるそまでゆ半さんのうるをつへ　アイサどうして
ハイきろ　それぢゃすゝゆくぎえすトいらへ

ゆづてゆへゆうこり爲へ　藏ふ小家の所へ気がはるの
きあるゝモウいけるのと言ちやアあませんよあまでで
この　あまでモウちのとおもうぢで恢えすゝ　イエ香で
ありますヨトいへ折ゝ世ふ形造いと花いたせきと
三潰へ赤り行ふ紙ふ書し物といぢ花へ今お付さんがお
いゝんふあげて宝ちとよこ　イきトみんぢといぢた
おいゝんいろゝ拔たあぢゝ　この　やとりやいろものこ
遠イスれ　花へ妙見さんのぢすとゆ　ゆ　おこせるき

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

ヨトあふぎてふるひ二十四番でありますす

番	四	十	二
万事何以寧	家中不安穏	是耶悪神形	西有白虎霊
	そもそもかつのそかんをする	ゆゑあんおひあきらめく	ゆゑの方ふあるくもの
	用心しなさいべし		あぐるとも彩のあふかり
			きこえ

天天天人地

この「ぎや」さらく絵岸ハ何方ふ賞りイするよ「てうど西ゆ
ふあうりますぐらく花「そなどやうまさえがおいらんの

「あふ」この「アヒサ」さづうふるれ「よ「おいらんへかつぐ此扇苦
労よあさこのままするのうが有ますのこ「この「ナニ」今始まつこ
苦労どやアありイせんが私やアこえるおそくでへ始ひ
ざまに今ハたとうまくでもまゆ結ーいとうあひが
とぐくとうるうう楽ふもうりイするなどがうにどやア
こうりイせん名人でハあくでもあの〳〵あふうるんと
いつくまさまあられるくうあるあう気を様のへみイ
せん花「そうざまにうまさくでへ此はうまーとゆイ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

きてふよ／おいらんエ吉い吉よゆつくりとやすらうぞ
おそれよ／おりけるさいまするエトいつぢおいらん世界ハ胸
ふあさりてやひいるゑの山路やいのぢうの行る浮川
作のあぢまの月そも傾城の狩といつく別よ蒔くる
畑もあーこゝる親ろ兄弟のくろふ小苦界の年のうち
色と高ひ色とつくーと用ひーても月と月の永い勤
めふ短夜の種もかぞへて暁を待夜もあまべるぐ
き夜の鄰の音恨む床のうち九分のくるゝ一分の

樂ここそまさく男の乳ふよりて尽せー情とあぐふ
きろ／ゆくも多くあるるまべ良まとといふもおろう
ある嗟傾城ふ実るーとい扱橋雑記の情よりさ
らず女郎の終月ハとりきまくぶーてくこゝ三十九
の上ハこすとも／であぢけるく花ゆふ月けのみへ
のぐ花ゆて折くの風情あるぐ真の勢情のところふ
して素人の操と守ると目と同ぢ／へーていぐうずず
必竟このすゝ世界ぐ憂月の異ハいつあーんそゝ秋

三編のもくじを解べし

着宮藤吾郎世話ものゝ作者自中ゝ奇境をきわめ

をすることゝ作者自中ゝ奇境をきわめ

てきさうはなしてゝ乳くをつべ「米八」「お蝶」「此

糸が実情と三幅対をしいきてう新奇のもの

俗あり発市の日をまつ世のことわざのこと

第十二齣

八重といふ工夫間ふ逆しの花の時へあり

ぶぐゝまぐ春風のさそはずやおもとゝひのまつ

知つくるゝしき今日の月ハ四の丹沼帝が〻あふ

ゝ奉ふ出仕召る浄瑠璃語とあり野の春も

竹蝶吉と呼ぶ月待月待よ招ぐ娘の浄

るり夏きるのそも宮芝万が丹誠ふ仕あげ

芸の間わどよく姫と鳴田の黒髪をきりて男に

対情が今幸ふる若元髷化粧をゝと美しさ

二階の窓よりでおとり今宵よべ〜お客の好

出ての後ふく一ぜん

上り

ナヲく婦れるもいもとでも配所が雑ねるぞ
そのや家ぞおさをぞいの代中きこ的ぞえの呼ーや
ゐせも今故ひんもとゆすさを兄のもとう前ーさぞ
ふぞとさふむらうとまを代合いねせんできこの
まをひのこるとまんまをよとをたが親方れあうり
一ぱそまをおもをとよ出ねんどふもおふとまいを

見せびらかしてねまーさたつさこんの婦れ何が紙ろう
くみても主あ記いあけきぞ下雑れ問いおもうにを
らぞぬせんでありとこをぬけもあとでいを出に分をあが
てさのどいおぞせよ雑中れ井ろうまをきまをおノ
配る和をこそきこうるとのとまをうりをキまをこう
ちさるあれみ小梅い身も世もあうまべこと。そ
世いを世ぞば実ねぞあを出ーい二祝み別て
よりそをこもるもを見ぜ物ーこの。こぞ鼠ホこそぞ
ちこうりある

此家の主人老女ゆてお阿と云る妻婦あり元へ
お岩が実の親唐琴屋の二階よりおとめ一番
なりしが強欲非道の曲のゆてつづらの金
より利をかさる今へかゝる雪の下寮防ぎも
なりいつるふ借宅して音曲の子供をかゝ渡世
とせしが此せんせ老のくびひきるそをくよ恨を
とりくさのお蝶と二十五両ゆてかく諸家へ立
いせて祝儀をとりいを活業とへいるすあり

ろうこの金八丹ごろ方へ　お岩以前つひ立ゆをを
母とかーづきくその内地ハ主人とおそを朝夕
にぎさあく呵らくに憎さ多詰の金といひ
るゞ抱へらく折りふそをぞとかづざし
更へるゞ家の中りをとゝずすてそのめーつひ
同ぜんふありすー運の拙るのさを日夜よ歌く
もものび返あのまたろうきさ世の中ゆりお河老
女いいろゞまーく階子の段をとゝきゞ

く蝶吉くヲイつんぢうめコウお蝶ちよすゆく
ヱ「おとびうく ヱ「いかげふ空耳をたうゥ世ェ
つんぢうめエ ヱ「ヲヤさろぢう初まき ぶぶ
モウ九ッが鳴こアナいうげんにしく支度をしれく
うろ麻くしい ヱ「をまでも今月の出ものハ私
ゲ語ろつけれくものごうろくく後つて行ふと
こをるものヲ ヱ「ヲいそれくすうにがかられく
でゐるときハさくくといふのふちぐして

居やアぐつくお屋ーきくおるとろ座ーたがある
とろいくと足元うう鳥の立ろこ世うふさハぎやア
ぐうア何でもおまをとろ麻よしてゐるうぐア
仮ふも狂ぐでおんまりに返答をーうヨぐ
侍ぐきくいきてくやうふ何もかもいれれく
さんぐんをさろぐいうぐでもめくの藝ぐら
いで二十の三十のといふ金の利合もをるのろ
そそでぐうう尤文太さるグトいひりけてそーごを

あごをおもゞ例ふすり笑ふ吉
左文太さゝはたそうに出門福ゞといふ
万長でも笑ひどやれくうそういふ金のちが世
話をしてやらうといもの出るのを今のうて逃
るもせず。やうぐんゞ洞ゞで居るのうかゞ
ゝるしいかゞゝ年いのゞ不吉なもイヱ今年で
浚つゝ居ると長吉殺しの所ゞあの目ゞゝツイ
涙ゞ出えでありますとフウリもめで語て

ゐめてやるしいのうぞふ笑人ゞその半ゞん
情のうりゝやうあいゞ廣場へ出して押あへ
しゝゝだゞゝとふる連も出来めゝ少し
小そくかゝゝ笑人いゐびで涙ゞゝうら
まゞしも目鼻ゞちゞまんそゝでこの白い
ゞお仕あいせそれゐゝ彼是人さゞゝまゐゐ
言てもゝゞさるのゞ蔓で立流ゐ舟形へ出来
れくとかういふのも出ゐゝの為ゞかのうゞき

竹蝶吉市至変く
石さま

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

十人ばかりで且那の二人やこ人ぐらいさらねく
ことけがあるものゝもへどもいかんお客を大切ふ
勧めて浄瑠璃を精出しませうがどうぞ且那
をとるの尤文太さまのお世話よりのといふ
るへ堪忍しておくんなさいヨ爺いんゆやそう
いやア此方も言ばざるめへ勝手を言ひちやア
やわへコレ浄るりを語ることはうばらめで三十両
うの金を出すものがあるとやうまさうの時

の用ばかり受ってある二枚の尤文且那がいや
あるゝ恋ゞ窟の郭へ入りて年一ぱい生涯一設
ゝのうどもこの中で苦界をするも亦よろう
且那へいやざるもあるゝしいアレサ母さんモウ
よへつれ出ばけふ参へば小言をおいひぶと
乱にかゝゝ参ざきの機嫌もとりゆくいヨ爺へ
にどうしやるとうゆゝへ往ぶどといヨ。ヨウふこ
言をといふと激しゝと身で居ばる大かゝと甚方の腰

の中ぢやア元主人ざといふ人気ぶらうげそうやア
あるゐど六七年いぜんふたしろ一年ゐどとんで
こうあく新手なる唐琴やの女郎衆の世話ア
して居る時もあるこがなつも奉公人ときまつて
勤めて居やアーれ。ョく なつすぎて昔がこうよい
ものゝ兵十私がそんなるすと思つて居やアた
ませんヨトロ少へいつどゐのこと言葉としつかも
あまりなつお河が雑言始とゐ迫るなそごの

たゝゝゝゝ折ゝゝ表の格子戸あけ武家の使と
ゐつくる男イチトおたのこやまます梶原の中き
ゝゝ参りまーと蝶吉さんの迷ひでござりました
ゑハイくこまんモウ大きふ品男さ及ヲヨ蝶吉
たゝく支度をゝれゝうアお茶でもあげませう
今日ハお客さ及ハ大ぜいさ及でござりますう
ゑハエイお客より芸者ゐの方が沢山でござり
ます 桜川善好 桜川新好 湯又話家でゝ

龍調ふ桁橋清えでハ志津太夫ふ寿女太
夫延津賀踊ってハ西川扇義義太夫ち
此方のお蝶さえふ小でん伝でもア大さうぎ
さア多へまやくそうやアアおりろうらうれ仕へイやく
きごあるへへおろが且那のいろいきの婦多川
の米八梅次トいへおりうろお蝶へちろくして二階
ようおりきろうこを二を吹くへまや米八さえとあう
もお出ごとろへ多アそんあるをきくより

りうきをうのでもねへゆうふーろさあうあうモシ
どうぞお那ひやいます模くゆ余所のろ若と
遠つく気が付ねへでとまり切ます仕ザお母そう
話ろさえろ娘子共のできろそこへコろいおばころ方ば
やりとつくーくってよろどぎろます寄りやせうろ子ち
いりて来ります仕イさあうあうイやどうで今日八盆
夜ふりますョ多へイそれへ有がうへお蝶乳をつけれへ
ちへイと出ろ風俗へ梅我ろまさろ愛敬貝上若なとで

ふ為七子上羽の蝶の菅笠後下ろへ嵐地紋よ大きく染一丁子菱縮緬の袷の白綾ふ朱紅で書画の印ばく袖へ緋麻子帯へまこ黒びろうどふ紅のぼかしのくくり仕立ちも同ふろ三井格子[illegible]の腰帯へおそど自茶の金まうる勿論印へすこ三分でも透ね流行ふ形ちぐんある若れ髷げふ義ふ姿ぶもお蝶げ身にへつぼ三ふも寄るえで楽まれ見も浮世うまるね定春色梅児誉美六ず

春色梅暦

子細ふ〜まふ顔で息子を禁制親父も。功徳池畔内ふ手湧出ることあるまず。弾勝ぐ〜〜数珠ぐ紅毋親ふ。菩提樹の二役ふ生形をず。さ〜ん男い主ふ厄の当ちまず。ざ〜ん男い主ふ厄の当ちまず。也すぐ。兎角当世の姫百達の戯言ふ

異ふもの。名情の草紙は非しる仁義
左は生ずあん。世の俗りの書肆の米箱
をうめをさるる。是将た小説家の
戯作の種蒔万ゝよきまる。人ゑ茲あ
開ゝ拙梅暦を為永大人の吉書始よ
して。書方ゞ金神の金得利を天初ん
得ゝる家のふ福。るつ年を広まの新ん

板。嗚呼趣向ゝ新しきる。室咲宮
梅も遂て及ざ。変生女るの新工夫ハ。
青漬の梅書をあ過ちゝの延
喜吉慶。恵方ゝ向ふく出方題て。
阿房孔支を存めるまて而已

九返舎主人戯述

207
60
2829

江戸爲永春水著

天保三壬辰年
當今流行
第一刷

春正月吉日

永壽堂　西村與八
文永堂　大鳥屋傳右ヱ門

江戸柳川重信画

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829
ガラス使用